

各位

平成 25 年 9 月 13 日
明治大学雄辯部 2 年 櫻井大智

社会言語学概説

目次——Enhavo——

0. はじめに
1. 社会言語学とは
2. 地域性と言語
3. 民族と言語
4. 社会階層と言語
5. ジェンダーと言語
6. 年齢と言語
7. 状況と言語
8. むすびに
9. 参考文献

0. はじめに

本日私が紹介させていただくのは、社会言語学であります。その名の通り、社会と言語の在り方・関係性を追求する学問ですが、実にニッチであると言える。

しかし、我々が所与のものとして受け取っている社会的属性と、同じく所与のものとして利用している言語が如何に関連しているか？ そして、言語が如何に政治的・社会的に利用されてきたか？ といった、普段であれば疑問も抱かないほど自然な部分を敢えて追求することで、言葉を人並み以上に用いる機会が多いであろう弁論界の学生の皆さんの助けになれば幸いです。

1. 社会言語学とは

社会言語学とは、ソーシャルに端を発するとされる近代言語学の中でも、とりわけ新しい研究分野であるとされる。端的に言ってしまえば、様々なデータを分析することを通じて、人間集団(=社会)と言語の使用を探求する学問分野である。社会言語学の誕生以前の言語学は、もっぱら通時的¹な観点から、文化の起源探求を目的として行われていた。あらゆる民族の文化は低次から高次へ進化を遂げるとし、一般には欧米の近代文化を最も進化した段階にあると見なした上で、言語を含む文化の比較を通じてその起源と発展を追求しようとしたのである。

これに対して、社会言語学がその範疇に置くのは共時的²な社会と言語との関係性である。我々の社会的属性が、言語にいかなる影響を及ぼしているか？ ということを追求する学問分野が社会言語学である。

2. 地域性と言語

2.1 概説

世界には、幾つの言語があるであろうか？ 現在、国連加盟国は193カ国である。では、言語の数も193程度かといえば、そうではない。現在、世界には約5000~7000もの言語が存在すると言われている。

なぜこれほど数の幅が広いのかといえば、その言語的アイデンティティにおける区別の定義が曖昧だからである。「相互に理解が可能か？ 文法に類似性があるか？ 政治事情はどうか？」など、様々な要因から同言語か別言語かの定義が異なってしまうのである。

さて、2009年のユネスコの発表によれば、日本には9つもの言語が存在するという(日本語をはじめ、アイヌ語、八丈語、八重山語、与那国語、沖縄語、国頭語、宮古語、奄美語)が、それらのうち日本語以外は話者の著しい減少から消滅危機言語とみなされている。これらの言語は我々の認識からすれば日本の地域方言と考えることが一般的であるが、ユネスコの調査によれば日本語及びその範疇に分類される方言(東北方言、近畿方言 etc...)と比べて文法や語彙、音韻等の観点からすると違いが大きすぎたため、同一言語と見做されなかったのだ。

本章では、言語の数え方、区分のされ方、そして言語政策など、言語と地域性に関する分析を紹介する。

¹ 過去から現在への、歴史における物事の変化を追求する視点。

² 時間軸に対して垂直に、現在の在り方を追求する視点。

2.2 言語と方言

社会言語学においては、「〇〇語」や「〇〇方言」といった用語には多少の注意を要する。

理由として、「〇〇語」と呼ばれる言語は完全に独立した言語であると、必ずしも言い切れない場合があるからである。例えばスカンジナビアの国々についてだが、デンマーク・スウェーデン・ノルウェーはそれぞれ公用語を「デンマーク語」、「スウェーデン語」、「ノルウェー語」として設定している。しかし、実際には殆どが同じ言語であり、意思疎通の妨げとなるケースは殆ど無いという(トラッドギル)。

逆のパターンにおいても同じことが言える。先述したような、ある言語の「方言」とされているものにも、その言語の公用語話者とは意思疎通が不可能な場合があるのである。意思疎通が出来ない、となると全く違う言語と考えられるが、それらは本当に方言なのであろうか。中国においては、書き言葉ではなんとか意思疎通が出来るが、話し言葉では全く意思疎通が出来ない方言が存在すると言われている(岩田)。

すなわち、言語と方言の区別は政治的・文化的な事情によって左右される所が大きく、なかなか明確な区別は行い難いのである。

2.3 言語変種³

言語変種はその話者に酔って様々な地域を歩き来し、接触を繰り返しながら徐々に伝播していく。特に昔は人の行けるところへ、人の通える速さで広がっていった。よって山河など交通の妨げが存在する地域や、異なるコミュニティに属する人と人の接触がほとんどない残留地域においては、通時的な言語の変化はあまりみられなくなる。これに対して、様々な人が接触しあう宿場町や文化の中心地においては、通時的な変化が非常に大きくなる。他にも、交通網の整備や戦の勝ち負け等の要因によって、様々な変種が生じたり消滅したりしてきた。

さて、言語変種に関する研究の中で興味深いのが、方言圏論というものである。柳田國男が『蝸牛考』において発表した³が、日本においては、文化・社会の中心であった京都における言語変種が威信をもって受け入れられ、京都を中心に同心円上に表現が広がりゆくというのである。京都においてデデムシ



³ 社会言語学においては、「〇〇方言」「〇〇訛り」といった表現が、崩れている・劣っている・品がないという印象を抱かせかねないとして、より中立的な表現として「言語変種」あるいは「地域変種」という表題がしばしば用いられる。

と呼ばれていた蝸牛は、関東と中国・四国において同じくカタツムリと呼ばれている。互いに隣接していなくとも、京都から等距離に在るが故この様に言語変種が生まれたと考えられる。そして今、文化・社会の中心地は東京に移ったため、関東のカタツムリが共通語となったと言うのだ。トラッドギルによれば、同様の伝播はイギリスをはじめ世界中に見られるという。

2.4 各国の言語政策

国家の中で複数の言語が使われている場合、行政や教育などの公的な業務に使用されると定められている言語変種が公用語である。すなわち、その設定には政治的要因が大いに影響を及ぼすと考えられる。公用語とは法律で定められた言語であり、複数の公用語が存在する地域・国家では全ての言語を平等に扱うことが義務付けられている。

例えばインドにおいては、全域で通じるのは英語だけであると言われる。これは当然、インドがイギリスの植民地であった事に由来する。しかし、憲法によってヒンディー語と英語に加えて 22 もの言語を公用語としている。これは民族の対立などを避けるために数多くの言語を対等に扱おうとした結果であろう。

他にも、英語とフランス語を公用語にしているカナダでは商品のラベルに記載する事項は全て両言語で併記することが義務付けられている。

打って変わって、公用語を指定していない国家も存在する。例えば日本がその例である。日本においては法律上は公用語は定められていないが、実質的には公文書も教育も日本語で行われる。

さて、公用語を国家のアイデンティティとして用いようとする言語政策も存在する。フィリピンにも幾つかの民族が存在するが、長い植民地支配によって英語もしくはスペイン語以外の共通語⁴ は存在しなかった。そこで政府は公用語をフィリピン語と英語と定めることで、一つのシンボルの下に文化的統一を図った。しかし、このフィリピン語に反発し、受け入れない民族も多いと言う。又、旧ユーゴスラビアにおいてもセルビアとクロアチアはかつて同じ言語を用いていた。しかし内紛に依る国の分裂を経て、セルビアは公用語をセルビア語と設定し、キリル文字を使うように。クロアチアは公用語をクロアチア語と設定し、ラテン文字を使うようになった(トラッドギル)。この様に、言語は他とのナショナル・アイデンティティの差別化により文化的統一を図る格好の道具となるのである。

⁴ 政府が定める公的な言語を公用語と呼ぶのに対して、住民が事実上用いている共通の言語を共通語と呼ぶ。

3. 民族と言語

3.1 民族と言語変種

日本で暮らす我々にはあまり意識されないが、同じ国に暮らす人達の中にも同一民族固有の特徴が見られ、しかもその特徴が何世代にもわたって続いていることがある。

イメージしやすいのは、アメリカにおける黒人英語(=アフリカ系アメリカ人の日常英語、African American Vernacular English)であろう。AAVE は地域や社会階層と関係なく、米国の様々な地域で同じような特徴を有している(=自然発生的な民族性の現れが見られる)。具体的には、簡易かつ明瞭化された発音、be 動詞の欠落、多重否定(回数に関わらず否定の強調の意味を持つ)の多用などがその特徴の例として挙げられる。

しかし、アフリカ系アメリカ人が常にそのような会話をしているわけではなく、彼らは TPO に応じていわゆる標準英語を使い分けることも出来るし、あるいは自身の文化意識や周囲の人間との仲間意識によって使用頻度が異なっているのだという。

一人のアフリカ系アメリカ人女性を調査した結果、会話の相手が AAVE 使用者であった場合に be 動詞は 70% が欠落したが、会話の相手が標準英語話者であった場合は be 動詞の欠落は 40% に留まったという(ラボブ)。ここに、「アフリカ系アメリカ人だからこそ AAVE を話し、アイデンティティを再確認する」という意識を伺うことが出来る。

3.2 AAVE は如何に生まれたか

AAVE の誕生の経緯には、アフリカ系アメリカ人の歴史的事情がその鍵を握っていると考えられている。アフリカ系アメリカ人は、17c~19c にかけて奴隷貿易で連れて来られたアフリカ人の子孫である。北米へは、約 400 万人が連れて来られたと言う。

さて、その誕生の要因には諸説あるが、通説とされているのはクレオール説である。西アフリカ地域出身の奴隷たちは元来部族ごとに文化が異なる多文化・多言語社会に暮らす多言語話者であったため、奴隷船の中ではアフリカの言語に基づくものや、ポルトガル語あるいは英語を基板とするピジン語が作られ、話されたと推測されている。このように相互理解の為に用いられたピジン⁵、そしてそれが発展した

⁵ ピジンとは、混成言語である。ピジンは交易の盛んだった地域や、植民地であった地域によく見られるという。そこにおいて必要とされるのは「その時、その場だけ」の意思疎通の為、あくまで通じることだけが目的であり、文法も単純で語彙も少ない。

クレオール⁶となったのが AAVE であるというのである。

3.3 言語変種が引き継がれる理由

AAVE に代表されるような民族的言語変種は、何世代にもわたって引き継がれる特徴を有している。この原因を分析した場合、話者の少数性にその一端を見出す事が出来るだろう。言わば言語的マイノリティである話者集団は、民族特有の変種を用いることで共通語・公用語に対して自身の民族的アイデンティティを強調し、再確認し、仲間意識を強めることが出来る。よって、学校教育などで公用語を用いられても、民族的言語変種が衰退することは無いのである。

4. 社会階層と言語

4.1 社会階層方言

トラッドギルは、社会階層を「似たような社会的あるいは経済的特徴あるいはその両方を持った個人の集合体」と定義付けた。階層差は地位の差に基づくものであり、地位とは人々がその人に対して払う敬意や金に関わるものである。

さて、日本において社会階層と言語の関係は見られるだろうか。「金持ち＝育ちがいい＝言葉遣いが綺麗」、といったイメージは共有しうるものであろう。イギリスやアメリカにおいて行われた研究では、この社会階層と言葉遣いとの関係が見事に明らかにされている。

4.2 標準変種と非標準変種

言語には標準変種(≒共通語)と非標準変種(≒社会方言)が存在する。これらは地域性のみでなく、社会階層によっても規定されている。田中春美によれば、変種と社会階層との関わりを見る上で重要なのが、変種に与えられる社会的評価である。この社会的評価には、威信と汚辱の二種類が存在する。

標準変種は、非標準変種よりも「正しい・上品である」などと感じられ、プラスの社会的評価を与えがちである。そこで標準変種は、威信ある変種として認められ、文化的・経済的優位性を有することになり、結果として上層階級が用いるようになる。

これに対して、非標準変種は「間違い・汚い」などのマイナスの社会的評価を与えがちである。そこで汚辱の変種として認められるが、その特徴として AAVE の

⁶ クレオールとは、ピジンを用いる両親の間で生まれた子ども達の中で発展した言語体系である。ピジンはその性質上、複雑な意思疎通は不可能である。しかしそれが数世代にわたって母語として取り込まれると、自然発生的に他の自然言語に劣らない新しい文法を備えた言語として発達するのである。

ようにアイデンティティの確率・仲間意識の高揚などの役割を有する場合がある。すなわち、使用者にとっては潜在的に威信を有する場合があるのである。そこで、言語仕様に非流動性が現れることが考えられる。

4.3 社会階層と地域性

トラッドギルによれば、社会階層の最上層に位置する人達は、下の階層の人達に比べて、一般的にどの場面でも標準変種を使用する割合が高い。すなわち、アメリカやイギリスにおいては階層が上がるほど標準変種を使用するので地域差はあまり見られないのである。

これに対して、階層が下になるほど用いられるようになる非標準変種は、社会的威信が無いため一定の方向づけが為されず、結果地域差が激しくなるのだという。

4.4 アメリカとイギリスにおける調査

4.4.1 アメリカの調査

アメリカの社会言語学者ラボブは、社会階層の言語に与える影響を調べるためにマンハッタンにおける3つのデパート(Saks, Macy's, S.Klein)で、従業員に対して調査を行った。それぞれ上層階級、中層階級、下層階級を代表するデパートである。すると、従業員の標準変種(floor の[r])の使用率が見事に社会階層と比例したのである。

4.4.2 イギリスの調査

トラッドギルは、イギリスのとある都市において人々を「職業・収入・教育・家の形態・地域・父親の職業」という6つの観点から人々を5つの階層に分類し、標準変種(ing の[n])の使用率を調べた。こちらにおいても、社会階層との比例関係が見られたという。 Cf) My Fair Lady, "Why Can't the English?"

5. ジェンダーと言語

5.1 男女の使う言葉

「あたし、怒るわよ」と誰かが言った場合、「俺、怒るぞ」と誰かが言った場合、それぞれ話者は女性と男性を想定するであろう。日本語には女性の話し言葉と男性の話し言葉に明確な区別が在るが、この例においては「あたし・俺」という一人称、「～わよ・～ぞ」といった終助詞がその判断材料になっていると考えられる。

では、一人称が常にIで表され、終助詞も有さない英語には男女の性差による言語使用の差はあるのだろうか？ 英語には日本語の女ことばや男ことばのように、

性差によって明らかに区別されている言葉遣いがあるわけではない。しかし社会言語学の研究が進むにつれ、英語にも男性の好む言葉遣い・女性の好む言葉遣いが存在することが判明してきている。

レイコフは、女性の言葉遣いに以下のような特徴があるとの調査結果を発表した。

- ① 女性は細かい区別の色彩語を使う。例えば purple という一般的な語ではなく、mauve(ピンクがかった紫)等。
- ② 女性は罵り言葉を避け、より中立的な言い方をする。英語では極めて下品とされる shit ではなく、oh, dear 等。
- ③ 女性は垣根言葉⁷を男性よりも頻繁に使う。
- ④ 女性は付加疑問文⁸を男性よりも好む。
- ⑤ 女性は男性より丁寧な指示・命令表現を用いる。

5.2 言葉に性差の生まれる原因

では、なぜこのような差が生まれるのであろうか。その原因は後天的なものか・はたまた生得的なものかといった視点から議論が重ねられている。しかし、一説によれば、有史以来の男性優位社会の中で、男性のほうが当然より大きい力を持ち、女性は男性に隷属してきた。そこで男女間の会話も、男性が統御するようになり、女性は相槌を打つ、相手の話の運びを助ける、といった性質を有するようになった。加えて男性は競争社会に生きているので、自分の糸をはっきりと主張するというスタイルが根付き、女性はそうはならなかったという分析がある。

5.3 性差別的言語

言語とジェンダーに関する研究はフェミニズムと深く関わっている。フェミニズムからの要請によって、大きく進歩したという側面も有しているかもしれない。フェミニズムを追求するその過程で人々はことばに関心を抱き、言葉の研究によりフェミニズムが影響を受けるという相互作用が存在したことも考えられる。

さて、フェミニスト的な思考で社会言語学を眺めれば、まずその自明の性差に目が行き着く。英語で言えば、男性は未婚・既婚問わず Mr.であるのに対して、女性は Miss もしくは Mrs.であった。これは差別的であり、フェミニスト言語学者達は女性も男性と同様に一義的な記号を持って然るべきだと考えたのである。又、fireman や policeman といった職業名も、性別分業に繋がる名称だとしてジェンダーを考慮しない代替表現 firefighter や police officer などにとって代わりつつ在るのである。

日本においても、同じ現象が起こっている。男女雇用機会均等法や男女共同参画

⁷ 垣根言葉とは、well, you know,のように断定を避ける表現である。

⁸ 付加疑問文とは、文末に付される~, isn't it? のような念押し・共感の言葉である。

社会基本法の理念において、看護婦や保母といった名称が看護師・保育士と改称されている。言語におけるジェンダーフリーはこれからも推進されそうである。

6. 年齢と言語

6.1 世代と言語

若者のことばの乱れを嘆く言説が横行している。では、中高年が批判するように若者と中高年の言葉遣いは違うのであろうか？ 違うとすれば、どのように違うのか？ 又、若者言葉があるとすれば、どのように生まれてきたのであろうか？

6.2 英語における関係性

アメリカにおける調査によれば、年齢と非標準変種(=威信の低い言語)使用率はV字型になったという。横軸が年齢、縦軸が威信のグラフを作成すると、非標準変種の使用が最も減るのが40~50歳の中年であった。

ホームズによれば、青少年は非標準変種を高い頻度で使用しており、その原因は「社会の基準に従うな」という反発心、およびそういった価値観の共有を強要するようなコミュニティにあるとしている。又、余談ではあるが、スクールカーストと言語使用の研究も行われており、ジョック(上層)からナード(下層)になるにつれて、非標準変種の使用率は高くなる傾向にあったとされている。

さて、中年の言語使用の特徴はその標準変種の使用率の高さにある。これは中年が社会において大きな役割を果たす時期であり、そこにおいて威信の高いことばを用いることへの社会からの圧力を感じるからであるとされている。

最後に高齢者であるが、彼らは社会の第一線から身を引く事によって、威信の高い言語使用への要請といったものが消失する、これにより再び非標準変種の使用率が上昇すると考えられている。

6.3 日本語における若者言葉の分析

次に、日本での関係性を見ていく。日本では近年、急激に語彙が増加したとされている。その一端を担っているのが若者言葉である。その性質としてはあるコミュニティに使用が限定されており、排他的かつ外部からすると理解の及ばない事が多いという事が挙げられる。以下にその例を記す。

・省略——ゲーセン、キモい等。省略によりことばには一種の隠語性が生まれ、そこに仲間意識・選民意識を感じることで流行したと考えられる。

・ら抜き言葉——今は若い世代だけでなく社会的に定着しつつある感のある言葉である。日本語の特性上、一部の語に関しては受け身と可能が区別できないという側面があったが、それを防ぐために自然発生的に発展したとも考えられる。

6.4 方言コスプレ

田中ゆかりは、若者言葉の特徴の一つとして、方言のおもちゃ化という現象を述べている。すなわち、方言を用いた言葉のコスプレ、方言コスプレである。例えば、関西人でもないのに「せやな」と相槌を打ったり、「なんでやねん」と指摘したりする、と言う事である。田中は「この方言コスプレ行動が、比較的若い年齢層を中心に、親密な間柄やくだけた場面において、どうやって自分の今の気持ちを伝えるかという言語行動の方略、strategy のひとつとしてすでに定着しつつある」と述べている。

この方言コスプレが繁栄している原因として考えられるのは、方言に対する憧れの念が強まったことである。今では、テレビやラジオの存在により多くの若者が共通語を用いることが出来るようになった。かつて、明治政府の国語政策によってその社会的地位を落とされた方言だが、今日においては共通語が蔓延し方言の希少性が高まったことにより、ステータスとしての方言に憧れを抱く若者が増えたのではないかと推察することが出来る。

7. コンテキストと言語

7.1 状況に応じた言語活用

我々は言葉を用いる時、状況や相手や話題によって、最もふさわしいと思われる言葉を選択し、用いる。例えばフォーマルとカジュアル、オフィシャルとプライベート、シリアスとユーモラスなどの状況の区別に加えて、相手との心理的距離や地方的差異、年齢差、性差などを考慮し、その言語使用に反映させるのである。

つまり、言葉の差異というものは、民族や社会的地位といった社会的属性だけでなく、その場その場の状況、コンテキストによっても生じてくるのである。

7.2 レジスター

「使い方」の視点で分類される言語変種をレジスターと呼ぶ。すなわち、友人と会話する私と、質疑応答中の私は同一の人物ではあるがその用いる言語変種は異なっている。こういった状況によって生まれる言語変種がレジスターなのである。

トラッドギルは、この様に状況を規定する要因として「手段・主題・役割関係」の三点を挙げている。

さて、ことばの置かれている状況が最も顕著に現れるのは語彙である。専門性の高い分野では特定の意図のみで用いられる単義的な単語が多いため、レジスターの項目も多いとされる。又、語彙ほど解りやすくないが文法・音韻からも状況が推測できる。

8. むすびに

言語に関する学問というのは、少し考えれば「ああ、なるほどね」と感じるものばかりです。特に社会言語学は我々の最も身近にある学問であると言っても過言ではないでしょう。しかし、だからこそなかなか目に付きにくい。

我々は知らぬ間に意図すること無く言語を振り回し、そしてしばしば言語に振り回されています。

本発表を経て、皆様の言語観に多少なりの変化があれば幸いです。

9. 参考文献

- フロリアン・クルマス 著、山下公子 訳(1987)『言語と国家——言語計画ならびに言語政策の研究』 岩波書店
- 真田信治(2006)『社会言語学の展望』 くろしお出版
- ピーター・トラッドギル 著、土田滋 訳(1975)『言語と社会』 岩波新書
- 鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』 岩波新書
- スザン・ロメイン 著、土田滋 訳(1997)『社会のなかの言語——現代社会言語学入門』三省堂
- 植田晃次、山下仁(2011)『「共生」の内実——批判的社会言語学からの問いかけ』 三元社
- ましこひでのり(2002)『ことばの政治社会学』 三元社
- 田中春美、田中幸子(1996)『社会言語学への招待——社会・文化・コミュニケーション』ミネルヴァ書房
- 中村桃子(2012)『女ことばと日本語』 岩波新書
- 今井むつみ(2010)『ことばと思考』 岩波新書
- 岩田祐子、重光由加、村田泰美(2013)『概説 社会言語学』 ひつじ書房
- 田中克彦(1981)『ことばと国家』 岩波新書
- ロナルド・ウォードハフ 著、多部滋 訳(1994)『社会言語学入門 上・下』 リーベル出版
- 岡本真一郎(2013)『言語の社会心理学——伝えたいことは伝わるのか』 中公新書
- ヴァルター・ベンヤミン 著、久野収 編(1981)『ヴァルター・ベンヤミン著作集3 言語と社会』 晶文社
- 柳田國男(1930)『蝸牛考』 岩波文庫

以上